

Title	Histoire sincere de la nation francaise, par Charles Seignobos, 29ed., 1933, Paris
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.162(742)- 163(743)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二月號 に至る論文及び口繪について作成されたものであり、これを件名、國別、口繪、著者の四索引に分つてゐる索引としては殆ど完備してゐるものと思はれる。此に依て研究上の便宜を得た事を喜ぶと同時に、編纂者の勞を多とせねばならない。(今宮新)

Histoire sincère de la nation française,

par Charles Seignobos, 296d., 1933. Paris.

曩に廣瀬哲士教授の『佛蘭西二千年史』(昭和六年四月刊行、菊判三三六頁、後改題して『佛蘭西全史』といふ)と高市慶雄氏の『佛蘭西史』(列國史叢書中の一冊、同年六月刊行、四六判二六六頁)とが、相前後して刊行せられ、乏しかつた邦文フランス史に遽かに二部を加へたことは西洋史學界の幸福とする所であつたが、又別にパリ大學ソルボンヌの二人の史學教授によつて、二部の歐文フランス史が加へられた。一つはギニニエール氏のフランス國民史(私の手にしたのは英譯 A Short History of the French People, 2 vols., 1930)であつて、大判千頁三十八頁に及ぶものであるが、他は表題のセニョーボス氏の四六判五百二十頁の著述である。

廣瀬教授の著述はその序文にも示してある通り(三頁)主として Jacques Bainville の Histoire de France, 2 Tomes, 1926. p. 600. に準據したもので、著者が佛文學者であるだけに讀ませる文章を以て綴られ、王黨的原著者の色彩も移されて妙味がある。たゞ餘り歴史用語の反譯に苦心せられた結果、却つて新機軸を出

し過ぎはせずと思はれる節もないではない。所謂三部會を全國通級會議と譯した如きはその一つである。高市氏の著書は寧ろ在來の教科書型に編述せられたフランス史であるが、固有名詞には特に注意が拂はれて『佛蘭西の地人名は佛語音を以て表示』(例言一頁)せられた譯であるが、餘りに誤り多く發音せられてゐる。

さうして『アルサス・ローレンも、本書の主義では「アルサス・ローヌ」とすべきだつたらう』(例言二頁)とあるも原語主義ならばそれは『アルザス』と言ふべきであらう。

パリ大學二教授の著述はそれ〴〵特色を有し、兩書に比して一層清新の氣に充つるものがある。斯學に經驗深く、著書多きセニョーボス老教授の新著は、Essai d'une histoire de révolution du peuple français と小題が附せられてゐる通り、『過去に於けるフランスの住民が如何なる變遷を経て現在のフランス國民を作り出すに至つたかを』述べんとし、フランス生活の主成分としての生活の條件、習慣、制度の起原を求め、フランス固有のものゝと外來的なるものとの限界を明かならしめんとし、氏の得意とする政治史的發展の記述に重きを置いて之を他の諸般の方面に及ぼしたものである。本書の變つた表題は氏の説かんと欲する所を明かにしたもので、史學の發達したる今日に於てこそかく言ひ得るのであつて、在來の歴史が誤り多きものであることを暗示するものである。進歩的立場にある氏が民衆本位に説いたこの一冊の小フランス史は吾人の讀むべき良著として何人にもその推薦を躊躇すべきでない。原著が忽ちにして二十九版を重ねてゐるのに見ても本書の聲價は知られるのである。歐米に於ける正しき歴史が一

般の讀物としてかく歓迎せられてゐることは歴史教育の宜しきを得たことの成果であるとして吾人の羨むべき所である。

たゞし本書と雖も部分的には瑕疵なしとしなう。その一つだけを指摘して置かう。教授はロンドン・キーンの亂の終末を記して

L'anniversaire du dernier combat (27 mai 1871) continue à être célébré par une manifestation socialiste au "mur des Fédérés." (p. 452.)

と書いてゐる。そのことには誤植と見らるべき性質のものではない。即ち同氏の著書から踏襲せられたるものである。即ち

Le dernier combat se livra au cimetière du Père-Lachaise le 27 mai. (Histoire politique de l'Europe contemporaine, 7e éd. Tome I. 1924. p. 224.) とならば、之は誤植であらう。その日は二十七日ではなく二十八月であるのである。例へば、同一の記事 Even today these memories, yearly revived by a demonstration at the Mur des Fédérés..... on the 28th of May, remain vivid among our people. (Guignebert, Vol. II. p. 630)

But Mac-Mahon's preparation to attack caused them to think better of it and they surrendered on the 29th. However, the battle in Paris was over on Sunday the 28th. (E. S. Mason, the Paris Commune, 1930. p. 295) の如くに記されて居り、大ラルースにも、大英百科辭典にもこれが五月二十八日となつてゐる。又ラロンスの著は之を一層明確にして、

La bataille expirait, au cours de la nuit du 27 au 28, un combat atroce, de tombe à tombe, avait arraché le Père-La-

chaise aux Fédérés. (G. Laronze, Histoire de la Commune de 1871, d'après des documents et des souvenirs inédits. 1928. p. 628)

と記してある。されば、二十七日の夜から二十八日にかけて行はれた戦争を、二十七日或は八日とすることの是非を言はないとしても、毎、社會主義者によつて行はれる示威運動はその何れかの日でなくてはならぬ。(間崎万里)

The Intelligent Man's Review of Europe To-day,

by G. D. H. Cole, M. I. Cole, London, 1933.

私は自分のために、又學生諸君のために手頃なヨーロッパ最近世史に關する書物を探めようと思つたのである。

先般、出づかシヤクソン氏の著述 (J. Hampden Jackson's Europe since the War, 1933. PP. 144) を、『戦後ヨーロッパ』(一九一八年乃至一九三二年間)の政治的發展を要領よく簡単に取扱つたもので、我が片田氏の著述(本誌第十一卷三號書評欄参照)に對比すべきものであるが、それよりも稍詳細で、且つ諸般の方面に互つて記述せられてゐるのが表題の本書である。

本書に於ては、ヨーロッパの概念からその大戦後に至るまでの歴史的發展が先づ記述せられ(一七一―一三四頁)、次いでその諸國の地理的狀勢(一三五―一三九四頁)、更に經濟狀態(一三五―一五六四頁)、及び政治制度(五六五―一六九七頁)が説かれ、最後の二篇